

- 野辺地町では夏季冷涼な気象条件を活かした高品質な「野辺地葉つきこかぶ(地域団体商標)」を生産していたが、近年の気候変動(異常高温)による品質低下(茎葉黄化・萎れ)や雑草や病害発生が顕在化
- このため高温条件下で品質低下が発生しにくい品種選定と雑草害・病害低減のための展示ほを設置し、具体的データを生産者や関係者に示しながら、新品種・防除技術の導入を推進
- 高温期の作型における「玉里3号」の一斉導入により品質面のクレームが激減し、雑草及び病害の防除技術の導入が促進

具体的な成果

1. 高温出荷時における新品種の一斉導入

- 栽培面積約85haのうち 高温期出荷向けの18ha全てに「玉里3号」を導入



展示ほにおける現地検討会

2. 品質面のクレーム減少

- 市場関係者からは、「玉里3号」の導入に伴い小売店から寄せられる茎葉黄化や萎れについてのクレームが激減したとの評価が得られ、生産意欲が向上



市場関係者との意見交換



黄化・萎れの少ない「玉里3号(下)」

3. 雑草害等の低減

- 薬剤処理による雑草低減と病害軽減の効果について 具体的なデータを部会員に示し技術導入を推進

普及指導員の活動

平成28年～29年

1. 展示ほの設置(有望品種選定・病害対策)
 - 平成28年は有望品種選定、平成29年には有望品種の栽培最適化を目的に設置
 - 病害対策の展示ほは2か年とも設置
 - 収量・品質等の調査に加え、茎葉黄化、雑草発生についても可能な限り数値化して調査
2. 導入品種のPR
 - 現地検討会や市場に出向いて実施した意見交換会において、生産者と市場関係者の両者で有望品種の特性・品質の確認を行い導入品種の優位性をPR
3. 担い手の育成
 - 若手農業者の技術・生産意欲向上を図るため 先進地視察研修や研修会・意見交換会を実施

普及指導員だからできたこと

1. 展示ほの設計や評価手法にあたって 専門技術を生かすことで、地域に合った品種導入・防除技術の普及につなげることができた。
2. 信頼関係を構築している 先導的な農業者から展示ほの設置・運営に最大限の協力を得た事で説得力のあるデータ収集や部会への普及ができた。

青森県

新品種導入による「野辺地葉つきこかぶ」の産地力向上

活動期間：平成 28 年度～29 年度

1. 取組の背景

野辺地町では、夏季冷涼な気象条件を活かし、少ない耕地面積でも高収益が得られる品目として「こかぶ」に着目し、昭和 50 年代後半に 5a の試験栽培から産地化が進められた。現在は、生産者 40 名で約 90ha 作付けされている。

当初から一貫して食味・品質にこだわり、栽培品種はシーズンを通じて「玉里」に統一している。この取り組みは市場関係者からも高い評価を得てきており、葉ごと生でも食べられる高い品質を PR するため、平成 24 年に「野辺地葉つきこかぶ」として地域団体商標を取得した。

しかしながら、近年の極端な気候変動（異常高温）により、夏場に品質低下（葉の萎れ・黄化）が発生するようになった。そこで、高温条件下でも葉のしおれ・黄化が発生しにくく、食味が慣行品種「玉里」並みの品種選定や、雑草低減・病害軽減のための実証展示ほを設置し、新品種の円滑な導入による品質低下軽減を目標に普及指導活動を行った。

2. 活動内容（詳細）

（1）関係機関との認識共有

生産者・農協と品質低下発生の現状について認識を共有し、栽培技術向上・新品種導入のいずれに解決の途を求めるのかについて意見交換を行った結果、新品種導入を図ることとし、候補品種についての情報収集・検討を行った。

また、意見交換の過程において雑草発生により通気性が悪くなることで軟腐病の発生も認められることから、この点についても技術対策が必要との共通認識に至った。

さらに、生産者の高齢化に伴い部会員が年々減少していることから若手農業者の技術向上及び新規作付者育成についても取り組むこととなった。

（2）展示ほの設置（有望品種選定・病害対策）

① 有望品種選定

平成 28 年度は、有望品種選定の展示ほを 2 地点設置し、既存品種「玉里」を対照に 4 品種の比較栽培を行い、収量・根部外観品質の一般調査項目に加え、地上部生育量及び出荷後の環境変化を模した条件下での茎葉黄化発生程度について調査を実施し、「玉里 3 号」を有望品種として選定した。

平成 29 年度は、「玉里 3 号」について種苗メーカーからの助言に基づき、減肥試験の展示ほを 1 地点設置し適正施肥量の検討を行った。

② 病害対策

平成 28 年度は 2 地点、平成 29 年度は 1 地点の展示ほを設置し、土壌消毒



有望品種選定の展示ほ

剤による雑草低減と病害軽減について効果検証を行った。

(3) 導入品種の PR

生産者と市場関係者参加の下で開催された現地検討会や市場に出向いて実施した意見交換会において、両者で有望品種の特性・品質の確認を行い導入品種の PR を行った。この他、部会独自の活動として東京都、盛岡市で試食会を開催し、消費者への認知度向上に努めた。



展示ほにおける現地検討会

(4) 担い手育成（若手農業者、新規作付者）

若手農業者の技術・生産意欲向上を図るため、千葉県への先進地視察研修や部会内先進農業者を講師とした研修会・意見交換会を実施した。新規作付者育成については、町内及び近隣地域でこかぶを作付けしていない農業者に対してアンケート調査を実施し、掘り起こしを行った。

3. 具体的な成果（詳細）

(1) 高温出荷時における新品种の一斉導入

展示ほ設置の結果を受け、平成 29 年は「玉里 3 号」が一斉導入され、栽培面積約 85ha のうち高温期出荷向けの 18ha 全てが「玉里 3 号」に切り替わった。また、減肥試験の結果から適正施肥量が把握されたことで平成 30 年度以降は品種・適正施肥の組み合わせにより導入品種の特性を活かした更なる高品質化が見込まれる。



収穫後の茎葉黄化（玉里）

(2) 品質面のクレーム減少

市場関係者からは、「玉里 3 号」の導入に伴い小売店から寄せられる茎葉黄化や萎れについてのクレームが激減したとの評価が得られ、若手農業者を含めた部会全体の生産意欲向上に繋がった。

(3) 雑草害等の低減

薬剤処理による雑草低減と病害軽減の効果について数値化したデータを部会員に示し指導を行ったことで、防除技術が導入され始めた。



茎葉黄化の少ない玉里 3 号

4. 農家等からの評価・コメント

（ゆうき青森農協野菜振興会こかぶ部会長）

茎葉黄化や萎れに関するクレームは、発生に生産者間差があることに加え出荷段階では判別できず、市場・小売り段階に生産物が届いてから判明するという厄介な状況に近年悩まされてきました。新品种導入によりクレームが激減したことで部会員も安心して生産に取り組めると感じています。今後も生産技術や部会活動について助言・協力をお願いします。

5. 普及指導員のコメント

(上北地域県民局地域農林水産部農業普及振興室 主幹 古川尊仁)

既存品種「玉里」を通年作付けしても茎葉の萎れ・黄化を発生させない技術の高い部会員もあり、技術を高めることで品質を維持するべきとの意見も聞かれたが、全員の技術レベルを一気に高めることは困難である。

技術を高めることと並行して品種特性を利用した高品質生産の重要性について、部会内の調整を重ねて意識統一を図りながら品種導入を進めたこと、茎葉黄化による品質低下については、葉色値を用い黄化程度を数値化して部会員に示したこと等が円滑な品種導入に繋がったと考えている。

6. 現状・今後の展開等

高品質多収のための品種探索・栽培技術向上は永遠のテーマであることから、今回の展示ほ設置を通じて得られた品種評価手法を更に高めていく。

また、2か年の取り組みからは既存農業者からこかぶを新規に作付けする農業者を育成できなかったが、平成30年度から非農家の2組(3名)が「地域おこし協力隊」として都市圏から就農移住した。現在こかぶ農家において技術習得研修中である。今後は彼らに対し座学を中心とした指導・支援を行い、地域の担い手として育成していく。